

アニマルウェルフェア畜産の市場性

The Importance of Greater Consideration for Industrial Animals

桑島雄三 株式会社パル・ミート 商品統括部長

Yuzo KUWAJIMA Products General Manager (Director), Pal Meat Co. Ltd.



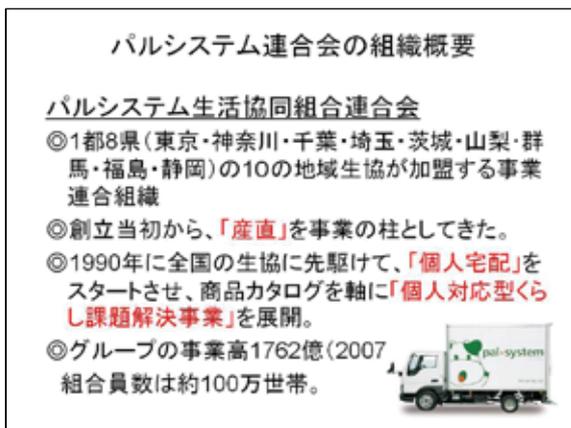
ただいま紹介いただきましたパル・ミートの桑島と申します。

私のほうは、今回、佐藤先生から、アニマルウェルフェアで育てた畜産物が商品事業としてどういうふうに成立するか、について話してもらいたいというふうに言われましたので、そのことを中心にお話ししたいと思います。

まず、私どもの生協の紹介を、最初にさせていただきます。



【スライド1】



【スライド2】

パルシステム生協連合会というのは、関東を中心とする10の地域生協の連合体です。生協は各県に一つという県もありますが、関東は三つとか四つの生協グループでしのぎを削っております。大体各県における2番手の生協グループでございます。創立当初から、産直を事業の中心としてきましたので、産直と言えば今、いつ、どこで、だれが、どのようにつくったかわかるように

したいという、生産の履歴をはっきりさせたいということと、安全・安心というところで進めております。現在のグループの組合員数は、約100万世帯が加入しております。【スライド2】



【スライド3】

もう一つの特徴は、ほとんど店舗を持たない無店舗の宅配事業です。宅配事業のカタログというのは、どこの生協でも一つの媒体しかないんですが、私どもは三つの媒体で、同じ週に三つの媒体を発行しています。一番左側のほうが、赤ちゃんができた、いわゆる乳幼児をお持ちの家庭、真ん中が、食べ盛りの中高生の御家庭、右のほうは、いわゆる団塊世代と申しましうか、子育ても一段落したと、そういう御家庭をそれぞれ対象にしたカタログを発行しております。【スライド3】

パルシステム(グループ会社)

パルシステム連合会のグループ会社

社名	事業内容	出資比率
株式会社パル・ミート	牛・豚等の精肉加工、ハム・ソーセージ等加工食品製造および加工	100%
株式会社ビーエス	農産物・米の仕入れ、企画・販売、物流業務および農産物の加工	100%
株式会社ブレッド	パンおよび菓子類の製造	100%
株式会社ネットワーク	通信販売、情報提供サービス、情報システム等の企画、設計、販売、保守	60%
株式会社ふれあいサービス	保険代理店業務	20%
株式会社サポート	古紙等のリサイクル事業、肥料・飼料の開発および販売等	40%
株式会社メッセージサービス	商品案内・注文用紙および帳票などの丁合、ラッピング業務等	100%
株式会社ライン	首都圏地域生協の配達および個人別セット	94%
株式会社オー・トレード・ジャパン	食料品および日用雑貨品の輸出入と販売	36.4%

【スライド4】

私は、そのグループの中で、肉の仕入れ、企画、調整をする専門会社の部分で働いております。【スライド4】

パル・ミートは、全国の生産者と提携して、仕入れから加工までやります。具体的には、まず千葉の習志野工

豚バル・ミート(会社概要)

生産者の思いを組合員へ伝える バル・ミートの事業

バル・ミートは生産者と提携して、バルシステム生活協同組合連合会の生協組合員へ「安全・安心」で「おいしい」肉を届ける目的で設立されました。当社の工場は、飼養管理された国内産産地の原料肉を主体に国内産肉のみを使用し、全国トップレベルの設備とHACCPに準じた厳格な衛生管理基準のもとで製品を製造しています。

設立	1979年
事業高(2007年度)	135.8億円
従業員(2008年4月時点)	社員64名、契約社員30名、パート社員247名

【スライド5】

バルシステムの牛肉産直産地(年間約2400頭)

徹底した安全管理で、 牛が食べたえさまでわかるから 安心して食べて欲しい。

バルシステムの産直牛肉は、だれがどう育てたかわかるだけでなく、産地からみなさんの食卓に届くまでの流れが明らか、おいしい牛肉をいつも安心して食べて欲しい、それがバルシステムの願いです。

牛肉の産地一覧

- 1 COOPノーザン・グリーン産直産地(3~20年内生産者)
- 2 COOPノーザン・グリーン産直産地(ホクチクファーム)
- 3 COOPノーザン・グリーン産直産地(社管内肉産直産地)
- 4 熊本産地
- 5 宮崎産地

【スライド9】

豚バル・ミート(習志野事業所:千葉県)

近代的な製造機器を完備し、 高品質の製品を製造、加工しています

習志野事業所(現工場)は2002年4月に建設された。国内でもトップレベルの近代的な製造機器を完備した工場です。冷蔵牛肉・冷蔵豚肉の食味を重視した高品質な製品を製造、加工しています。(現状日量5万パック製造)

【スライド6】

バルシステムの鶏肉産直産地(年間約400万羽)

生産者の不断の努力によって たどりつけた 「飼料に薬を添加しない飼育」 という答え

一般的なブロイラーは、休養期間7日(飼料に抗生物質を添加しない飼育で、法的に定められています)という基準で飼育されています。バルシステムの産直産地は、徹底した衛生管理と産肉環境の整備など、生産者のたゆまぬ努力により全飼育期間で抗生物質を飼料に添加しない飼育体系を実現しています。

鶏肉の産地一覧

- 1 株式会社(内おしいケンファーズ)
- 2 株式会社(内おしいケンファーズ)
- 3 株式会社
- 4 株式会社

【スライド10】

豚バル・ミート(山形事業所:山形県)

国産豚肉100%、 化学合成添加物不使用のハム・ソーセージを実現

山形事業所は「子供たちに安全でおいしいハム・ソーセージを食べさせたい」という思いから、生協直営のハム工場として設立されました。その理念を実現するために、ハム・ソーセージの原料肉は国産豚肉100%で、化学合成添加物は一切使用していません。製造工程もすべて明らかにすることで、生協直営だからこそこの安全・安心を実現しています。(現状:日量2万パック製造)

【スライド7】

バルシステムの豚肉産直産地(年間約10万頭)

豚本来の生きる力を信じ、 健康に育てる。 おいしさ安全の基本です。

バルシステムの豚肉の産直産地は、現在11ヶ所。それぞれ土地柄も生産環境もさまざまですが、どの産地でもえさの内容を明らかにするなど、「産直ルール」によって、より健康な豚を育て、より良い肉をご提供しようと、日々努力を重ねています。

豚肉の産地一覧

- 1 やまはた
- 2 山形の産地
- 3 ゴールフランドグループ
- 4 株式会社(内おしいケンファーズ)
- 5 ナカシマ
- 6 株式会社
- 7 株式会社(内おしいケンファーズ)
- 8 株式会社
- 9 株式会社
- 10 株式会社

【スライド8】

産直産地(生産の特徴1)

特徴1 薬に頼らないために

豚はわずかな環境の変化でもストレスを受けやすく、病気にかかりやすいデリケートな動物。そのため一般的には、病気予防目的で法定休養期間ぎりぎりまで飼料に抗生物質を添加する場合もあります。しかし、バルシステムの産直産地では、できるだけ薬に頼らない飼育をめざし、衛生管理・温度管理の徹底や豚舎の密度を抑えるなど、飼育環境を整えて豚のストレスを軽減し、自然治癒力や免疫力を高めることに努めています。

【スライド11】

やはり生協組合員さんの関心の高いテーマというのは、当初より薬、いわゆる動物医薬品、抗生物質などの

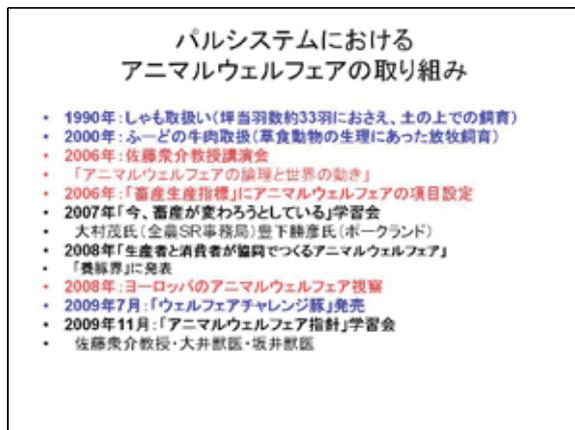
残留についての非常に懸念の声がありましたので、そこに対してどうしていくかというのが課題でした。つまり、薬剤を減らしていくためには、まず、健康な飼育、健康な飼育環境をどうするかということが生協の一貫したテーマであったということです。【スライド 11】



【スライド 12】

もう一つは、えさの中身を明確にしたいということです。消費者とすれば、通常、売られているものがどういう飼いかたがされて、どういう餌や薬剤が使われているかがよくわからないから、そのことをはっきりしていただきたいということが、非常に思いとして強いことです。

【スライド 12】



【スライド 13】

今回のテーマであるアニマルウェルフェアは、私どものほうがアニマルウェルフェアとして意識し始めたのは、2006年に、佐藤先生をお呼びして、生産者や生協組合員と一緒に学習会をしました。そこからです。それ以前は、アニマルウェルフェアというようには意識はしていませんでしたが、いわゆる地鶏シャモのように、先ほど、小原先生のほうからのお話もあったような、坪当たり羽数を抑えた土の上での飼育体系で地鶏シャモや、北海道でアンガス牛を放牧、飼育しております。そういう形で、草食動物である牛としての生理にあった飼育ということなどをテーマに進めてきました。それと、2006年から、畜産生産指標という、私どもグループ内で、

産地と一緒に適正農業規範、GAP的な考え方で生産指標をつくってきました。その一つの項目で、アニマルウェルフェアに取り組んでいますかという項目や、アニマルウェルフェア的な考え方で、えさや水の適切な配置といったような項目設定をしました。その後、また、学習会を生産者と一緒に積み重ねながらやってきました。2008年に、ヨーロッパのウェルフェアの視察に行きまして、先ほど豊下さんから発表がありました、ウェルフェアチャレンジ豚の発売ということなど現在、本格化に入ったということです。【スライド 13】



【スライド 14】

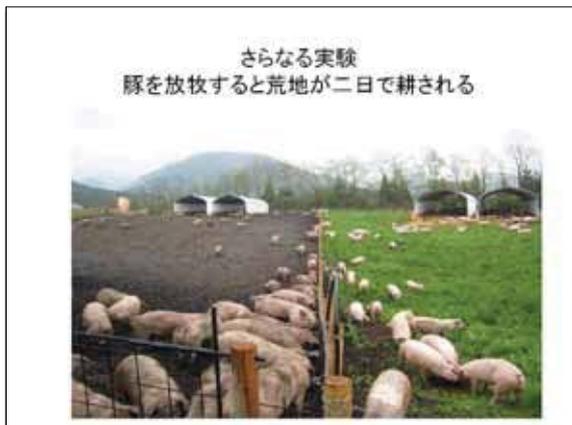


【スライド 15】

今、紹介しましたコア・フードの地鳥シャモは年間約3万羽で、こういうような環境のもとで従来から飼っております。牛肉は、これは今後の売り方にも絡むんですけれども、年間150頭を半年間の登録で、毎月約12頭ぐらいを組合員さんに、これを食べたいという方に登録してもらって、12頭をちょうど4,500人で割れるぐらいの量のものを、毎月お届けするという仕組みで運用しております。【スライド 14】【スライド 15】

このウェルフェアを意識した項目は、畜産生産指標の項目として盛り込みました。重点としては、やはり家畜のストレスを軽減していくことが一番大きいんじゃないかという考え方です。そのことによって、動物医薬品の使用を抑えられるということを、私どもとしては期待し

て、何百万円もかかる土木工事じゃなくて、この豚さんの力を活用したような耕作放棄地活用法もできないかと。そのことによって、自給飼料の向上も図れないかというふうには考えております。【スライド 24～31】



【スライド 26】



【スライド 27】



【スライド 28】

これを実際に販売したときのチラシです。こんなような別チラシを発行してウエルフェアを前面に打ち出して、その名もウエルフェアチャレンジ豚という形で出しました。このポーランドの新たな取り組みということで、説明とか背景を書きまして、パルシステムは今お話ししましたようなアニマルウエルフェアに取り組みますという宣言を出しました。実際、どれくらい売れたかな



【スライド 29】



【スライド 30】



【スライド 31】

「ウエルフェアチャレンジ豚」受注結果

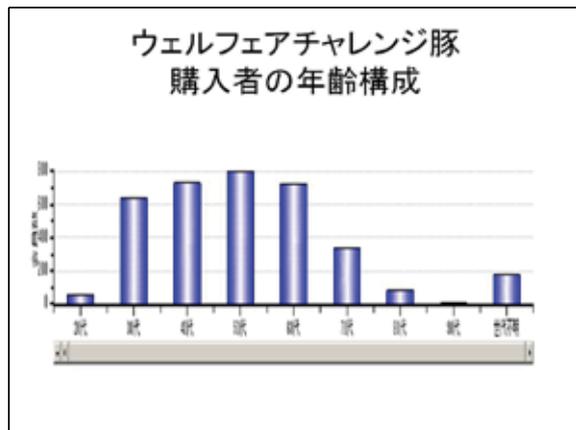
通常の産直豚より
単価が高いにも関わらず110%伸張した

- 7月2回産直産直通信において、ウエルフェアチャレンジ豚を企画しました。
- 評価は、比較条件が難しいが、下記のとおりと比較で算出すると、通常の産直豚より、単価が高いにも関わらず110%伸張したといえます。
- 企画は、別チラシ全額体であるが、本誌はキナリのみのため、別チラシのみの場合は通常点数の30%となる。
- モモしゃぶしゃぶ用(498円/200g)：通常組価(460円/250g)と100g単価は65円高く設定。
- 受注点数11,560(通常6600) (Y2000+M1万) × 0.3=3600+K5000=6600
- ロースしゃぶしゃぶ用(498円/190g)：通常組価は(474円/200g)と100g単価は11円高く設定。
- 受注点数6145(通常7360)(Y1200+M1万) × 0.3=3360+K4000=7360

・ 計 受注点数17705(通常15960)

【スライド 32】

んですが、結果として、単価が高いにもかかわらず、通常の豚より1割多く売れています。というのが、実は、ことし、畜産事業は非常に厳しいんです。御承知かと思いますが、市況が暴落して、私ども産直価格で、例えば市況で豚の枝価が400円を切っているときでも490円と、100円ぐらい高い価格で、仕入れた価格を反映した小売価格を設定していますので、非常に販売環境は厳しいです。そういう中でも、このウェルフェアチャレンジとか、あと飼料米を活用したこめ豚といったものは、通常の豚より支持はあります。価格設定は、通常組価100グラム単価より、もものしゃぶしゃぶは100グラム単価で65円高く、ローズのしゃぶしゃぶは11円高く設定しました。ただ、実は豊下さんがお話ししてたとおり、別にコストは上がっていません。上がってませんが、ほかの飼料米を使ってた豚だとか、いろんな豚との整合性上、これぐらいの高値で販売してみたらどうなるかというふうに考えてみたということです。【スライド32】



【スライド33】

購入者の年齢構成なんですが、これが圧倒的に中高年齢層のほうが多いです。というのは、こういうようなコンセプトを強調した商品は、なかなかやはり若い世代にすぐには受け入れられないという傾向が生協の中で以前からあります。有機農産物なんかもそういう傾向です。そういう意味で、40代、50代、60代の方が圧倒的に買われていますが、私どもとすれば、もっとやはり30代、40代の方にも、こういうことを広めていきたいというふうには考えてます。【スライド33】

今後の課題ですね。アニマルウェルフェアの今後の課題には、私どもは、まだまだ論議が不足していると痛感しています。まずは、この食肉という文化の中で、命をいただくことに感謝する、食育そのものをしっかりすすめたい。きれいにパックされたお肉ではなく、丸ごとの畜産物のことも含めて、命をいただくということに向き合っていきたい。そのために、こういう学習会を私どもは年間200カ所で開催しております。この豚の解体

「ウェルフェアチャレンジ」コアフードの牛肉・地鶏しゃも」が果たすべき役割

「資源循環型・環境保全型を掲げる農業・食糧生産の方式の中で、最も成功した事例として、生産者・消費者が誇りを持ってこれの生産・消費に関わり、より多くの人の理解を得ながら、この生産方式を広げること。」

これが果たすべき役割と考えます。

自給飼料拡大とアニマルウェルフェアへの挑戦も同様です。

まだ、パルシステム全体の事業の中では、少ないですが、着実に支持をひろげていきたいと考えています。(牛肉2400頭中155頭、鶏肉425万羽中3万羽、豚肉8万頭中400頭)

【スライド34】

今後の課題1「いのちをいただくことに感謝する」食育



「豚の丸焼き」の美濃(きさかみサマーキャンプ)

【スライド35】

の学習会も組合員の前で行っております。【スライド34】
【スライド35】

パルシステムでは畜産の学習会や試食会を年間200箇所で開催しています(日本におけるアニマルウェルフェアに関する論議は欧米に比べ、まだ未成熟では)



豚の解体学習会

【スライド36】

それと、今後の課題の二つ目は、欧米基準を踏まえたやはり国内認証の整備にも、私どもは関与していきたいというふうを考えております。欧米基準とかけ離れないことが大切です。一方で日本型の基準として仮に欧米と違う基準で設定する場合はその理由を明確にしておくことも必要です。それと、コストダウンの課題です。イギリスの農家さんによると、これはかえってコストダウンになると考えたそうです。大規模な設備をつくるよりも、アウトドアの屋外にして、外で飼うことがコストダウンの一つの解決策という考え方もあったそうです。これに

今後の課題2「欧米基準をふまえた国内認証の整備」
 イギリス畜産肉は(ブリティッシュポーク)として品質保証マークをつける
 イギリス国内法では、(1)去勢してはならない(2)ストールで飼ってはならない(3)番をつないではならないことになっている。これに適合する豚は第3者(MLC)が検証し、生産者とPPAでラベルを発行する(デンマーク産をメイドインUKと偽装される事件が発生した)



【スライド 37】

愛護とは他人に言われてやるようなものではない
 大事なことは、何かの犠牲の中で生きていかなければならないという事実をよく知り、その犠牲に対して、感謝の気持ちを失わないこと



【スライド 40】

今後の課題3「コストダウン」

- 畜産の生産家は1000年、動物愛護がコストダウンになると気づいた。
- 畜産業者はコストダウンを推していた。だが、動物の健康や福利を犠牲にしてはならないという考えが根付いてきた。動物の健康や福利を犠牲にしてはならないという考えが根付いてきた。
- 畜産業者はコストダウンを推していた。だが、動物の健康や福利を犠牲にしてはならないという考えが根付いてきた。動物の健康や福利を犠牲にしてはならないという考えが根付いてきた。
- 1996年「豚肉が狂った豚肉」事件は、動物の健康や福利を犠牲にしてはならないという考えが根付いてきた。



【スライド 38】

輸入飼料に依存する国内畜産の現状

農水省生産局畜産部畜産課「自給飼料をめぐる現状」平成17年5月より

品目	品目自給率	飼料自給率	カロリー自給率
牛乳・乳製品	69%	42%	29%
牛肉	39%	26%	10%
豚肉	53%	9.7%	5%
鶏肉	67%	9.7%	7%
鶏卵	96%	9.7%	9%
畜産物計	67%	24%	16%

【スライド 41】

ついて、先ほど申し上げましたとおり、仮にコストアップにつながるとしても、私どもはやらなきゃいけない課題だと思っていますが、コストダウンにつながる可能性についても追求していきたい。【スライド 36 ~ 38】

今後の課題4「国内畜産業への理解促進」
 EU基準には至りませんが、日本国内の養豚家も従来より豚を健康に育てることに努めています



【スライド 39】

荒れ果てる耕作放棄地



【スライド 42】

減反政策で、先祖伝来の田んぼにお米がつかれない



【スライド 43】

それと、やはりこのアニマルウェルフェアの問題は、当初、取り組むときに躊躇したと申し上げましたが、今もまったくなくなったわけではありません。つまり、国内の畜産業に対して、今の飼い方にまだ多くの課題はあると思います。ただし、課題はありますが、経過と現状について共通認識が得られないまま、消費者と畜産業者との反感が起きると、また、次の段階に進むことが難しいので、そのためのリスクコミュニケーションが今、大

飼料米として蘇った水田

2008年7月鹿角市小坂町(ポーランド飼料米田)



【スライド 44】

変必要だなどというふうに考えております。

ということで、私の報告を終わらせていただきます。
ありがとうございました。【スライド 39～47】

自給飼料へのチャレンジ



【スライド 45】

09年はこめ豚で、約83haの減反田や耕作放棄地を飼料米の田んぼに蘇らせ、約490トンのとうもろこし輸入を減らします。

年度	上段:作付面積・収量 下段:こめ豚飼育頭数	備考
07年飼料米 =08年こめ豚	11.2ha(56t) 2,800頭	軽米5ha 鹿角6.2ha
08年飼料米 =09年こめ豚	14ha(73.7t) 3,446頭	新しいわて(軽米)5.8ha 鹿角8.2ha 09秋に追加生産1400 頭(国内の飼料米平配)
09年飼料米 =2010年こめ豚	83ha(489t) 18,000頭	「こめ豚」向けに鹿角40ha+取 田鹿角17ha、 「こめ豚」向けに新しいわて5.8ha で4万羽計画。 その他、北浦、しも、宮部園とん トンなどの地元でも飼料米栽培。

【スライド 46】

パルシステム提携産地全体では
09年度から2010年にかけて
1,313t分以上の
輸入穀物を自給飼料に転換予定

品目	重量(t)	取組畜産産地
飼料米	1,073	ポーランド、米沢郷、トキワ養鶏、やさと、花見園 までっこ、宮部園とんトン、北浦しゃも
規格外米	180	米沢郷
規格外小麦	54	ホワイトファーム
規格外大豆	6	北浦しゃも

【スライド 47】